

待降節第2主日

福音朗読 マタイ 3・1-12

2022.12.04

カトリック高円寺教会

主任司祭 高木健次神父

今日の福音の朗読では、イエス様が直接登場していません。その代わりに、洗礼者ヨハネが救い主との出会いを準備するように訴えています。

わたしたちと救い主であるイエス様との出会いというのは、他のどんな出会いとも比べられない、次元が違う。それはただ単に人間としての姿が見えなかったり声が聞こえなかったり、そういうことだけではなくて、聖霊を通してイエス様にわたしたちが会おうと言うときに、じゃあ聖霊はどこにいらっしゃるのかと言うならば、わたしたち一人ひとりが聖霊の神殿ですから、わたしたち一人ひとりの中にいらっしゃる。なので、イエス様に聖霊を通して会おうというのは、わたしたちの中にいらっしゃるイエスに出会うということなんです。つまりは、イエスと会おうということと、わたしたちが自分自身に出会っていくということとは切り離せない。イエスに出会えば会おうほど、わたしたちは本当の意味で主によって造られ、そして、主によってあがなわれた自分自身のほんとの姿に出会っていく、ということになります。ですから、カトリック教会は、イエスとの出会いというのが、聖書を読むということだけではなくて、ご聖体を通してイエス様が一人ひとりの中に入って来ることができるように制定されたって信じているし、また、イエスと会おうために聖体を拝領して一人ひとりの中にお迎えするという、それが大事なわけなんです。つまりは、自分の外側の誰かに会おうということじゃなくて、中にいらっしゃるイエスに出会う。だから、繰り返しになりますけど、イエスに出会うことと、自分自身の姿に出会っていくということと切り離せないです。

その準備をするために、今日洗礼者ヨハネは「主の道筋をまっすぐにせよ」と、イザヤの預言の言葉を用いて訴えているわけですけど、真っ直ぐにするというのは、山を低くし、そして谷を埋める、とあとに続いてくるわけです（イザヤ 40・3-4）。もちろんそれは、物理的意味での自然破壊のことを言ってるんじゃない。心の道筋ですから、わたしたちが高慢の山を低くして、そしてまた自分自身を見損なっているというか過小評価している、その谷を埋める。神無き高慢を捨て、そして神無き卑下を止める、そういうことを含んでいるわけです。神様の前でわたしたちは、他の人と比較して自分がおごり高ぶる必要はないし、そして一人ひとりの中に神様がいらっしゃって、

自分自身の力っていうものを見失わないようにしなければいけない。あるいはそこに
出会って行くのが、イエスに出会う恵みであります。

今日は「宣教地召命促進の日」となっています。宣教地というのは、バチカンの定
義で、カトリック信者の割合が人口の何パーセント以下の地のことです。もちろん、
日本は宣教地に違いない。しかし、アジアでは、フィリピンは宣教地ではないんです。
それから、韓国も宣教地じゃなくなるかもしれない。まだ宣教地です。けどあとは
だいたいみんな宣教地です。日本ももちろんそうです。昔は「宣教地司祭召命促進の
日」って言ってましたけど、司祭だけじゃなくて、修道者だけではなくて、一人ひと
りの信者が自分のキリスト信者としての生き方っていうことを問い、また、若い世代
がそのことを見出していくようにというための日であります。

そういう意味で、一人ひとりがイエス様を通して、イエス様に造られイエス様にあ
がなわれた自分自身のほんとの姿に出会って行くように、共同体全体としてもその必
要があるということをおこの機会に思い出したいわけです。つまりは、神無き高慢、日
本の文化は特別だからとかいうようなことで、いろんな外国の人も今日本の教会の中
にいるしそれぞれのやり方があるんだけど、そういう他の人々から学ぶという姿勢が
ないとか、そういう高慢を捨てて、普遍教会の指導に耳を傾けるとか、自分たちは自
分たちだけでやれるんだからってというような高慢の中で孤立主義的なことっていう
のは改めなきゃいけないんだらうと思います。

一方でまた、日本の教会は高齢化してるし、信者も増えないし、司祭召命とか修道
者召命とか召命も減ってるし、みたいなことで、もう先細りなんだと勝手に決めつけ
て、人間的なレベルでの対応ばかり考えるっていうのは、ある意味で神無き卑下と
言ったらいいのかな。でもそれは、イエス様の教会なんだ、ということをお忘れちゃう
わけです。

ある時、2代前の東京大司教の白柳枢機卿様に韓国の初代枢機卿のキム枢機卿様が
「韓国は信者がたくさん増えて、日本は全然増えないんですけども、どうしてでしょ
うかねえ」とおっしゃったら、「いや、いつか聖霊が吹きますから大丈夫です」とおっ
しゃった。韓国もそれが吹いたときがあったんだというようなお話をされたっていう
ことを分かち合ってくれたことがあるわけですけども、それは直ぐじゃないかもしれ
ない。でもわたしたちはそれを待ち望まなきゃいけないわけです。もちろん信者の数
が増えればいいってわけじゃない。神様ご自身が教会を導き、そして成長させてくだ
さる、そのことに希望を置き続けなければならないわけです。

旧約聖書でエレミヤっていう預言者がおります。それは、イスラエルの民が、エル
サレムがバビロニアによって滅ぼされちゃって、自分たちの国がなくなっちゃった。
そして、主だった人たちがバビロンに連れて行かれた。バビロン捕囚っていう、国が

無くなり、神殿が無くなり、王様が無くなり、神様との繋がりが断ち切られたように思われるときに、エレミヤはバビロンに連れて行かれた人たちに手紙を書いて、この状態は長く続くから、腰を据えてバビロンに定住する覚悟を決めなさいって言うふう言ってる（エレミヤ 29 章）。だけどそれは、この状態は国が滅んじゃってもうしょうがないから、バビロニア人になりなさいって言うてるんじゃないんです。バビロンに定住する、その覚悟を決めるけど、でもそこで自分たちは何者かっていうことを忘れることなく、神の民なんだということのを忘れることなく、神様が解放してくださる日、それはエレミヤは 70 年と言っていますけど、70 っていうのは象徴的な数字で、その時が来たらという、その時が来たら神様が働かれる、それをわたしたち神の民が実感する日が来るんだから、その時まで定住の覚悟を決め、つまり現状を受け入れ、でも現状に流されないように、ということをやっている。

それは、わたしたち日本の教会に対しても同じように受け取っていいんじゃないかなと思います。だから、無責任な楽観主義、これに陥るわけにはいかない。やっぱり現状を見ながら。だけど、この教会は人間が作ってるんじゃないんだ、イエス様が中にいらっしゃって、イエス様が集められたんだ、ということのを忘れてはならないと思います。そしてまた一人ひとりも、自分が自分一人でいろんなことが出来てるんじゃないという謙虚さと、でも自分の中に神様がいらっしゃるんだっていうことを忘れて自分は駄目だとか、こんなもんなんだと、変えられていく希望を持たないという、神無き高慢と神無き卑下あるいは絶望に陥らないようにするっていうことが大切だと思います。その中で、現状を生きながら何が大切かを見極めていく、それが一人ひとりの、そしてまた共同体全体としての召命を生きる、召命を促進するということなんじゃないかなと思います。

だから、今日、一人ひとりも、また教会全体も、イエス様ご自身が中にいて導いてくださるし、そしてほんとの自分たちの姿を示してくださるんだという希望のうちに、ご聖体を通して、また祝福を通して、一人ひとりの中に、またわたしたちの中に、イエス様をお迎えしたいと思います。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>